

会話パートナー・ハンドブックの作成と改訂

－留学生と日本人学生の交流・異文化理解促進の一環として－

松本 久美子

はじめに

- 1 会話パートナー・プログラム
 - 1-1 会話パートナープログラムとチューター制度
 - 1-2 会話パートナープログラムと会話合同クラス
2. 会話パートナー・ハンドブックの作成と改訂
 - 2-1 作成の経緯
 - 2-2 改訂
3. 会話パートナー・ハンドブックVer.3
 - 3-1 作成上の留意点
 - 3-2 構成
 - 3-3 内容
 - 3-4 配布方法
4. 使用報告および用途の可能性
 - 4-1 日本人学生の反応
 - 4-2 用途の可能性
5. 今後の課題

[キーワード] : 会話パートナープログラム、日本人学生用ハンドブック、異文化接触場面、異文化理解、多様な視点

はじめに

留学生受け入れの数が伸び続ける中、近年多くの大学で、チューター制度やバディ・プログラム、会話パートナー・プログラム等、留学生と日本人学生の交流を目的としたものや、留学生のサポートを目的としたプログラムの運営がなされている。これらのプログラムが円滑かつ有効に機能するためには、オリエンテーションの実施、ガイドブックの作成等、プログラムに登録している学生に対する教育的な配慮が必要である。

長崎大学においても、留学生の支援を主たる目的とした「チューター制度」¹と留学生と日本人学生の交流を主たる目的とした「留学生と日本人学生のための会話パートナープログラム」(以下、「会話パートナープログラム」と略す。)²が運営されている。

会話パートナープログラムは留学生センターの教員によって運営されており、開設から6年が経過した。この間、アンケート調査の結果や、活動上の問題点に関する個別相談の内容をもとに、日本人学生用にハンドブックを作成し、2度の改訂を行った。

本稿では、まず、長崎大学で実施している「会話パートナープログラム」をチューター制度と比較し、その性格と目的をはっきりさせた上で³、会話パートナー・ハンドブック作成までの経緯と、改訂部分を含む具体的な内容について報告する。また、会話パートナー・ハンドブックの用途の可能性について、使用報告とともに若干の考察を加える。

1. 会話パートナー・プログラム

1-1 会話パートナープログラムとチューター制度

国立大学⁴でいう「チューター制度」は文部科学省の規定によって制度化されており、学部留学生には入学後2年間、大学院生および研究生には研究科所属後の1年間、チューターが配置されることになっている。チューターは大学によって選定され、一定の謝金が支払われる。チューター制度は、選定されたチューターが留学生の指導教員の指導の下に個別の課外指導を行い、留学生の学習・研究効果の向上を図ることを目的としている。このように、チューターの立場は基本的に支援者であり、学習・研究上の支援とともに生活上の支援も行う。

これに対して、会話パートナー・プログラムは、長崎大学留学生センターの教員によって開設され、運営されている。センターの出した募集広告等を見て、留学生との交流に興味を持った日本人学生が自発的に応募するもので、謝金は支払われない。会話パートナーのマッチングはプログラムの運営を実施しているセンター教員によって行われ、ペアとなった留学生と日本人学生は、自分たちのスケジュールとお互いの興味・必要にあわせて活動内容を決める。このプログラムは、留学生と日本人学生に個人と個人の継続的な異文化接触の場を提供すること、また、それによって両者の、日本語を基本的な

媒介言語とした実践的なコミュニケーション能力の向上と相互理解を促進すること、がその目的の中心に据えられており、互いに学びあうという視点を基本に交流が行われるよう配慮されている。

1-2 会話パートナープログラムと会話合同クラス

筆者は1997年4月から、長崎大学留学生センター日本語集中プログラム（大学院入学前の日本語予備教育）⁵の中に「留学生と日本人学生の初級会話合同クラス」⁶（以下「会話合同クラス」と略す）を開設し、その運営を担当している。会話合同クラスでの活動の中で、留学生と日本人学生双方から、もっと一緒に活動できる場を設定して欲しいという要求があった。同じ大学で勉強していても、留学生と日本人学生が出会い互いに交流する場は実際にはかなり少ない。日本人学生と知り合いになりたいと思っている留学生も、勉強・研究で忙しく、そのチャンスがつかめないでいる。一方、留学生と交流を持ちたいと考えている日本人学生も、どうやったら留学生と交流する機会が持てるか、わからないでいる。

こうした状況の中で、出会いの段階では、ニーズと目的のはっきりした、しかし、その後活動を続けて行く段階では、留学生と日本人学生双方の自由意志を尊重したプログラムが必要だと考えた。そこで、会話合同クラス開設の1年後、1998年4月に会話パートナープログラムを開設した。

2. 会話パートナー・ハンドブックの作成と改訂

2-1 作成の経緯

1998年4月に「留学生と日本人学生のための会話パートナープログラム」を開設してから、6年が経過した。この間、留学生の会話パートナーとして活動している日本人学生に対するアンケート調査の結果や、活動上の問題点に関する個別相談の内容から、会話パートナー登録時のオリエンテーションだけでなく、特に日本人学生の活動の助けとなるようなハンドブック作成の必要性を強く感じた。

ここではハンドブック作成の経緯について順を追って説明する。

日本人学生で、それ以前に留学生との個人的な会話の経験を持っていない者の場合、特に初期の段階で、相手の留学生と何を話したらいいのか、どのようにコミュニケーションをとったらいいのか途方に暮れたり、会話の途中

で立ち往生してしまったりするケースが高い割合で見られた。

そこで、まず、「活動初日のための会話キッド」を作成し、留学生とのマッチングが成立した日本人学生に手渡すことにした。会話キッドには、日本人パートナー用と留学生用がある。日本人パートナー用のシートには世界地図が、留学生用には日本地図がプリントされており、名前、趣味、専門に始まって、出身地、気候、観光地など、7項目の質問が並んでいる。それらの項目にしたがって互いに質問しあうことで、自己紹介がスムーズに運ぶように配慮されている。

プログラム開設当初は、会話合同クラスに継続的に参加しながら会話パートナーとして活動している日本人学生の割合が80%から90%であったため、この会話キッドと週1回の会話合同クラスでのコメント、もしくは個人面談で、会話パートナーとして活動する日本人学生の抱える問題に対応できていた。しかし、プログラムが広がりを見せ、参加学生の数が増加するに連れて、会話合同クラスに参加できる学生の割合が次第に減少してきた⁷。また、一方で、留学生との交流に興味はあるのだが、会話パートナーとして個人ベースで活動することに不安を覚える日本人学生が少なからず見られた。

こうした状況に対する対策として、2000年8月から、新たに日本人学生会話パートナーのためのハンドブックの作成を開始するとともに、同年10月から日本人学生会話パートナーのためのメーリングリスト⁸を開設することにした。

2-2 改訂

2000年10月初旬、日本人学生会話パートナーのためのハンドブック（A4版40ページ）の作成作業が終了し、同年10月中旬から会話パートナーとして活動を始めた日本人学生に配付した⁹。これは活動初日のための会話キッドに加え、異文化接触場面での注意事項等をいくつかのトピック別にまとめたものである。

その後、留学生の会話パートナーとして活動している日本人学生に対する半期ごとのアンケート調査の結果や、活動上の問題点に関する個別相談の内容をもとに、2003年4月、初版に大幅に加筆・修正を加え、『会話パートナー・ハンドブックVer.2』（B5版85ページ）¹⁰を作成した。初版では、異文化接触場面での注意事項等をトピック別にまとめていた部分を、「コミュニケー

ションのとり方」と「日常生活にまつわるエピソード集」として編成しなおした。また、日本人学生の体験談を新たな項目として付け加えた。

第2版完成後、会話パートナーとして数年にわたって活動を継続していた日本人学生5人に、第2版の内容・形式等について個別にインタビューを行い、2度目の改訂作業を行った。第3版の主な改正点は、留学生との交流経験のない日本人学生に異文化接触場面の事例の状況をよりわかりやすくインパクトのあるものにするために、なるべくイラストや4コマ漫画形式のものを取り入れたことである。

以上の作業を経て、2004年4月、『会話パートナー・ハンドブックVer.3』（B5版97ページ）が完成した。

3. 『会話パートナー・ハンドブックVer.3』

3-1 作成上の留意点

留学生の会話パートナーとして活動をしていく中で、日本人学生は、いろいろな考え方の違いや行動パターンの違いに直面することになる。それらは文化の違いによるものなのか、相手の個性なのか。また、意思の疎通が難しい（話が通じない）場合、それは単にことばの問題なのか。

留学生とのコミュニケーションが上手くいかない場合、多くの日本人学生がその原因をことばに求めがちである。また、留学生との交流の経験が少ない者に限らず、かなり経験を積んだ者でも、異文化接触の場面では自己の文化的背景を元に自動的に判断を下しがちである。また、一方で、それらの原因をすべて文化的なものに求めてしまう傾向も見られる。

これらのことを考慮しつつ、ハンドブック作成の際には、大きく以下の3点に留意した。

- ①まず出会いの段階で躓かないように十分な配慮を行うこと。
- ②コミュニケーションを成立させるための重要な要因を具体的にはっきり示すこと。
- ③留学生と交流する中で、必要以上に失敗を恐れず、多様性を尊重し、それを楽しむ態度が育まれるように、事例の取り上げ方にバリエーションを持たせる等の配慮を行うこと。

具体的には、以下の、「構成」と「内容」の部分で説明する。

3-2 構成

ハンドブックは大きく以下の5つの部分から構成されている。

- ①会話パートナー・プログラムとハンドブックについての説明
- ②会話パートナー初日の活動内容および注意事項
- ③留学生とのコミュニケーションのとり方
- ④日常生活にまつわるエピソード集
- ⑤会話パートナー経験者3人による座談会

これら5つの部分は、3つ（①②③・④・⑤）に分けられ、それぞれの目的に従って、事例の提示の仕方、編集方法等を変えてある。

①②③はプログラムに登録した全員が活動前に必ず目を通しておくことを前提に書かれており、異文化接触場面で摩擦の原因となった問題点を事例として取り上げ、活動に際して注意すべき事項として明確に提示し、説明するよう心がけた。また、媒介言語となる日本語でのコミュニケーションのとり方についても、問題となる点を列挙し、具体的に説明している。

これに対して、④では、問題となる事項を事例として取り上げ日本人学生の注意を喚起するという形式ではなく、キャンパスライフも含めて日常生活の中で実際に起こった色々な事柄をエピソードとして取り上げてある。これは、文化的な背景を異にする相手との交流を体験することで、日本人学生の、文化の多様性を楽しむ態度を養うこと、また、留学生との関わりの中で起きる事柄について、以前とは異なった視点で見直してみるきっかけを与えること、を目的としている。

⑤の部分は、これから活動する日本人学生にとって、ハンドブックの内容を、より身近でリアリティのあるものとするために、会話パートナーとして活動している日本人学生の座談会の内容をほぼそのまま掲載してある。

3-3 内容

①会話パートナー・プログラムとハンドブックについての説明

第2版に加筆・修正を加えたもので、平均的な活動時間や活動場所、ネットワーキングや相談のための連絡方法（ML等）について簡潔に述べてある。

②会話パートナー初日の活動内容および注意事項

第2版に加筆・修正を加えたもので、会話キッドの内容を広げたものと、次回の約束をするときの注意点について、具体的に順を追って説明してある。

③留学生とのコミュニケーションのとり方

会話合同クラスのための補助教材『留学生と日本人学生のための会話素材集—Let's get to know each other better! —』には、Ver.3から、初めの部分に、日本語でコミュニケーションを円滑に行っていくための注意事項と文化を異にする相手とコミュニケーションを行う際の留意点をまとめたもの（8ページ）、を掲載していた。③はこの部分に加筆・修正を加えたもので、以下の4つの項目に分けて具体例を挙げて述べられている。

1. 異文化コミュニケーション能力
2. 「日本語」によるコミュニケーション
3. コミュニケーションの相手としての態度
4. 留学生の国についての質問

2では特に留学生と日本語を媒介言語として会話を行っていく上で、日本語によるコミュニケーションがうまく成立しない場合の原因を9つのカテゴリーに分け、それぞれ具体例を挙げて説明がなされている。3と4では、留学生から頻繁に質問・相談を受けた事項で、日常生活に見られる日本人の言語表現や行為の中で、留学生が特に疑問に思っていたり不快に思っていることで、異文化摩擦の原因となっている事項が取り上げられている。

④日常生活にまつわるエピソード集

日常生活の中で起こった異文化接触にかかわることが、以下の12項目それぞれについて、2つから6つ、エピソードとして取り上げられている。エピソードの項目数とタイトルは、第2版と同様である。ここで取り上げられているエピソードは、留学生に対する日本語教育や留学生の指導相談に携わってきた中で、筆者自身が経験したことや、留学生から、また日本人学生から、彼ら自身の経験したこととして聞いたものである。

1. 買い物

- ①スーパーマーケット・市場 ②物価 ③バーゲンの時期
- ④値引きは可？ ⑤自動販売機

2. 料理

①料理ができますか？ ②えっ！そんなもの食べるの！

3. 食事

①家族そろって、ご飯を食べますか？

②何で食べますか？手？箸？フォーク？スプーン？

③音を立てて、食べなくてもいいですか？

4. 食べ物失敗談

失敗談①豆腐とチーズ 失敗談②味噌とピーナツバター

5. 生活様式

①和と洋 ②床の上に座って食事

6. 時間感覚

①約束の時間 ②パーティー ③急がなくていいよ。

7. 友人関係

①割り勘・おごり ②誕生日 ③お金の貸し借り

④ありがとう、ごめんね。 ⑤訪問 ⑥招待

8. 愛情表現

①男女間 ②夫婦間 ③親子間

9. ほめる時、ほめられる時

①皆さん、日本語がお上手ですね。うちのはぜんぜんだめで

②日本人：日本語が上手ですね。留学生：いいえ、まだまだです。

③女の人をほめてはいけませんか？

10. 誘い・断り・約束？

①断り ②誘い

11. 宗教

①主人はクリスチャンですから ②ところ違えば、宗教も…。

12. 日本語にまつわるエピソード

①「先生、顔が悪いですね。」 ②「先生、今日は頭がいい天気ですね。」

③5千円、お願いします。④どんな漢字？

⑤会話パートナー経験者3人による座談会

会話合同クラスと会話パートナープログラムの両方に参加し、積極的に活動してくれていた日本人学生3人に、会話パートナーとしての活動経験について

て、活動を始めたきっかけからこれまでの経験、学んだこと等について、座談会形式で自由に話をしてもらうよう依頼した。この座談会をビデオに録画し、録画テープを起こしたものを「会話パートナーを経験して（学生3人の座談会）」（26ページ）として掲載した。

3-4 配布方法

留学生の会話パートナーとして活動することを希望する日本人学生は、プログラムを運営する留学生センターの教員（筆者）にコンタクトを取り、面接を受けることになっている。プログラムの説明はハンドブックを使用して行う。日本人学生がプログラムの趣旨を理解し、登録カードに記入した時点で、直接ハンドブックを手渡している。また、日本語が初級レベルの留学生のパートナーとして活動する日本人学生には、会話合同クラスで使用している教材『留学生と日本人学生のための会話素材集Ver.3－Let's get to know each other better!－』（B5版187ページ）¹¹も会話の補助（参考資料）として配布している。

4. 使用報告および用途の可能性

4-1 日本人学生の反応

ハンドブックはプログラムに登録した時点で日本人学生に手渡すが、そのときに、留学生とのマッチングの前に、ハンドブックの少なくとも最初の部分（1. 2.）は読んでおくように伝え、マッチングの当日、ハンドブックを読んだ感想を聞くことにしている。多くの学生が一通り読んできているが、以前に留学生との交流がある者となない者とは、コメントの内容がずいぶん異なる。交流経験がない者の場合、「おもしろかったです。」「日本語でうまく話せるか、心配です。」というコメントがほとんどである。これに対して、それまでに留学生との交流経験がある者は、「おもしろかったです。」に加えて、ハンドブックの中の事例を具体的にあげて、自分の経験と重ね合わせながら、「あれは、～だったんですね。あの時、～すればよかったんだって思いました。」というような形でコメントが返ってくる。

留学生との交流経験を持たなかった日本人学生も、会話パートナーとして活動を始める前にハンドブックを読んだ時は、あまり“ピンとこなかった”ことが、留学生との活動がある程度続いてから改めて読み返してみると、自

身の経験と照らし合わせて、「あっ、これって、こういうことだったんだ！」と気がついたり、以前自分が留学生の言動に対して下した判断をもう一度新たな視点で考え直してみたりするようになってきているようである。

会話パートナープログラムのメンバーとして登録し、留学生のパートナーとして継続して活動している日本人学生は、留学生との会話のストラテジーを少しずつ身に付けてきていると言える。

4-2 用途の可能性

会話パートナー・ハンドブックの配布先として、会話パートナープログラムに参加している日本人学生以外に、以下のような対象が考えられる。

- ①大学の国際交流関係のサークル
- ②留学生の指導教員・学部の留学生担当教員
- ③留学生のいる研究室

①については、既に他大学の国際交流サークルから希望があり、新入部員のオリエンテーション、指導に役に立つというコメントをもらっている。

②については、長崎大学の学部の留学生専門教育教員および留学生指導主事に配布している。また、研究室で留学生を担当している指導教授3人にコメントをお願いしたが、「役に立つし、読んでいて話としてもおもしろい。研究室において、日本人大学院生にも紹介したい。」というコメントをいただいた。

また、一人の教授からは、ハンドブックを送付した時点の最初のコメントでは、「留学生と話すときに気をつけなければいけない点が指摘されていますが、何気なく話すと伝わりにくい表現があることに気づかされました。これからは講義の場合などでも気をつける必要があります。」という、主にことばの問題についてのコメントであったが、その後、担当留学生と日本人学生の上に大きな問題が生じた折に、もう一度連絡をいただいた。「異文化の接するところでの仕事の難しさや重要性が改めて分かりました。送っていただいたハンドブックを今回改めて読んでみましたが、留学生と対応する時に、特に心がけるべきことが紹介されていますので、時々読み返す必要があるようです。」という内容であった。

また、個人で使用するハンドブックとしての機能のほかに、異文化理解や異文化コミュニケーションに関連する授業での使用も考えられる。2つの大学

から、留学生センターの教員が担当する上記関連の授業（日本人学生対象）で、ハンドブックの一部をコピーして使用したいとの依頼を受けた。

5. 今後の課題

『会話パートナー・ハンドブックVer.3』はB5版97ページと、ハンドブックとしては、かなりページ数が多いものとなっている。今後は、④日常生活にまつわるエピソード集の部分を補足し、独立させ、2分冊にすることも考えている。

また、今後、留学生に対しても、同じようにハンドブックを作成する必要があるだろう。日本で生活する外国人に対して、日本社会全般についての説明や紹介が試みられている本は数多く出版されている。また、特に日本企業で働く外国人を対象とした、会社での人間関係、慣習にかかわる本も出版されている。しかし、日本の大学で学ぶ留学生を対象とした、日本の大学の研究室のシステムや人間関係、講義方法、研究方法の特徴について書かれている本（市販本）は見当たらない。一般の出版社ではマーケットが小さいため、出版は難しいであろうと考えられる。留学生数の多い大学では、留学生を対象とした、研究室での人間関係、日本人学生・教員・事務員とのコミュニケーションのとり方を中心としたハンドブックが既に作成されているかもしれない。複数の大学の教員が協力して、各大学がある程度共通して使用できるハンドブックの開発を進められればと考えている。既に作成を試みられている機関、作成に興味をお持ちの方があれば、以下のメールアドレスにご一報いただければ幸いである。

連絡先：kumiko-m@net.nagasaki-u.ac.jp

注

- 1 長崎大学におけるチューター制度と『チューター・ガイドブック - 制度の概要とチューターの心得 - 』については、以前、松本（2003）で詳しく述べた。
- 2 長崎大学における会話パートナープログラムについては、松本（2001）で詳しく報告した。
- 3 各大学で行われているプログラムの内容は具体的に見るとさまざまであるにもかかわらず、名称が類似しているものが多い。そのため、多数の大学

が集まった会議で、「会話パートナープログラム」「チューター制度」「バディ・プログラム」などについて議論する場合、混乱をきたす場合が往々にして見受けられる

- 4 2004年4月から国立大学は国立大学法人に移行した。
- 5 主として大学院入学前の留学生を対象とする日本語教育プログラム。2004年4月から、「日本語集中コース」から「日本語集中プログラム」に名称変更された。
- 6 「会話合同クラス」については、松本（1999）で報告したが、まだこの時点では『会話素材集』は作成されておらず、クラスでは会話シートを使用していた。
- 7 2004年3月現在では30%位になっている。
- 8 メーリングリストは、会話パートナーである日本人学生同士の情報交換および知識・体験共有の場として活用すること、また担当教員への質問・連絡等にも利用し、プログラムの活発化と円滑化を図ること、を目的としている。
- 9 会話パートナー募集は、留学生の新規来日の時期（4月と10月）にあわせて行われる。
- 10 『会話パートナー・ハンドブックVer.2』（2003年4月発行）は、各国立大学の留学生センター宛に1部ずつ送付した。
- 11 2004年3月に3度目の改訂作業を行い、現在は『Ver.4』を使用、配布している。

参考文献

- 大橋敏子・近藤祐一・秦喜美恵・堀江学・横田正弘（1992）『外国人留学生とのコミュニケーション・ハンドブックトラブルから学ぶ異文化理解』アルク
- 高松里（2002）『留学生と友だちになりたい日本人学生のための留学生超入門』九州大学留学生センター
- 坪井健（1999）「留学生と日本人学生の交流教育ーオーストラリアとの比較を通して」異文化間教育No.13 pp.60-74
- 松本久美子（1999）「留学生と日本人学生の初級会話合同クラスー双方向学習による異文化コミュニケーション能力の育成ー」『長崎大学留学生センタ

ー紀要』第7号 pp.77-96

松本久美子（2001）「会話パートナープログラムー留学生と日本人学生の相互理解に向けてー」『広島大学留学生センター紀要』第11号 pp.79-93

松本久美子（2003）「留学生支援とチューター制度の改善」『長崎大学留学生センター紀要』第9号 pp.23-42

松本久美子（2004）『会話パートナー・ハンドブックVer.3』長崎大学留学生センター

松本久美子（2004）『留学生と日本人学生のための会話素材集Ver.4ーLet's get to know each other better!』長崎大学留学生センター

松本久美子・宮原彬（2004）『チューター・ガイドブックー制度の概要とチューターの心得（第7版）』長崎大学留学生センター

三宅政子（1999）「パートナーシッププログラム：一つの試み」『名古屋大学留学生センターニュース』第10号 pp.1-2

箕浦康子（1998）『日本人学生と留学生－相互理解のためのアクション・リサーチ』平成7年度・平成8年度・平成9年度文部省科学研究費補助金（基盤研究B（一））研究成果報告書

横田雅弘（1991）「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』No.5 pp.81-97

横田雅弘（1999）「留学生支援システムの最前線」『異文化間教育』No.13 pp.4-18

（留学生センター助教授）